

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：33905

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18299

研究課題名（和文）現代農山村の男女による媒介的ネットワークを起点としたジェンダー構造のダイナミクス

研究課題名（英文）The dynamics of gender structure in rural areas through overlapping networks between women and men

研究代表者

畠山 正人（Hatakeyama, Masato）

金城学院大学・国際情報学部・教授

研究者番号：50635240

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、農山村の男女間ネットワークの可能性を探ることを目的とした。そのため、男女が共に実践するコミュニティ活動を調査し、その機能を探った。その結果、調査地域でのコミュニティ活動においては男性壮年層と比較して、女性、1ターン者、若者の意欲の高揚が見られたことを明らかにした。ただし2023年度の追跡調査では、地域活動貢献意欲がやや減退していることが示された。これは新型コロナウイルス感染症の影響によりコミュニティ活動が滞った影響であると考えられ、ゆえに彼・彼女達の意欲を支えるためにはまず、これらコミュニティ活動を継続的に実践することが必要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

農山村で男女が行うコミュニティ活動は、従来、「男＝主/女＝従」として捉えられることが多く、相互作用が農山村のジェンダー関係をますます助長するものとして認識されてきた。他方、近年の農山村では農業インテグレーションなどの新たな動きが見られるようになった。そこで、それを動かす男女間のネットワークにも変容が起こっていると仮定し本研究を行なった。男女間ネットワークにおいても女性の感情の高揚がなされたという発見事実は、男女間によるコミュニティ活動に新たな光を当てるという意味で意義がある。今後、その活動/組織的要件を探ることで、農山村のジェンダー変容や女性のエンパワーメントに寄与することが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to explore the potential of networks between men and women in rural areas. To achieve this, community activities practiced by both men and women were investigated to explore their functions. The results revealed that in the surveyed areas, there was a higher level of enthusiasm among women, returnees, and young people for community activities compared to middle-aged men. However, follow-up surveys in 2023 showed a slight decline in willingness to contribute to community activities. This decline is believed to be due to the impact of the COVID-19 pandemic, which disrupted community activities. Therefore, it is suggested that continuous practice of these community activities is necessary to support and maintain enthusiasm.

研究分野：経営組織論

キーワード：農山村 中山間地域 ジェンダー 男女共同参画 地域資源 地方創生

### 1. 研究開始当初の背景

農山村においては既に1960年代のエネルギー革命以降から過疎高齢化が進行し、その問題は現在においてさらに深刻化している。特に中山間地域においては、2000年代までの間に地域活動の中心的担い手層であった昭和一代が引退局面にあり、続く世代の絶対的な人数不足に直面している。それゆえこれまで地域づくりの周縁的な担い手層 特に女性 の活躍が待たれ、彼女達がよりアクティブに活動する基盤がそれら地域において求められている。

一方で既存の農山村における過疎高齢化の問題やその原因は、女性の存在を看過したもの(例えばインフラ整備、雇用機会、農業の商工業に比した相対的競争力の不足など)として捉えられる傾向にあった。ゆえに農山村女性の「生きづらさ」の問題は、農山村「全体」の問題とは個別に捉えられ、かつ未だ解決の方途を探る最中にある。既存研究は、農産物自給運動や生活改善普及事業等の農山村女性固有の活動やネットワークから、その解決の糸口を見出そうと試みてきた。そしてそれらは、女性の「生きづらさ」を発見し解決する主体であるとともに、農山村における既存の男性中心的組織のオルタナティブとして焦点化されてきた。

一方で近年の農山村では、農業インテグレーション(農業の六次産業化など)や新たな利害関係者(他出血縁者、都市住民など)に関連する活動が近年の農山村では台頭している。そしてそれらは、農山村の過疎高齢化の問題に対峙する新しいイニシアチブとしても捉えられている。一般的に見ればこうした創発的な活動は、性別に限らず農村コミュニティが総体的に取り組むものである一方で、新たな人的資源の発掘や醸成、人的ネットワークの形成に寄与するといえる。そこで本研究では近年の農山村におけるこれら創発的活動を新たな男女間ネットワークとして捉え、その活動が女性のエンパワーメント(本研究においては女性の活動意欲の高揚)の発端になるかを検討することとした。

### 2. 研究の目的

本研究は、これら創発的活動において女性のコミュニティ活動の意欲が如何に変化するかを明らかにしようとしている。これを明らかにするために、以下の2つの手順(=問い)の細分化作業を行なっている。

#### (1) 農山村のジェンダーに関する理論的整理

既存研究では、農山村において男女が織り成すネットワーク、つまり既存の農村コミュニティ組織は、「男=主/女=従」という構造が根付いているという想定のもと、男性に対する女性の相対的不利性を見出せるアリーナとみなされる傾向にあった(例えば日本における企業全般を眼差す視線がこれに近い)。当然ながらその視点は、イエやその連合体組織の体制を軸としてきた農山村においては不可欠のものであるが、上述のような変容可能性を包含している現代においてはア・プリアリに認めることに懐疑を呈することは必要である。そこで、農山村における種々の新たな取り組みから見出される男女間の相互作用の場面において、ジェンダーの変容可能性を見出すことが可能なのかについての理論的整理を行う。

#### (2) 農山村の男女が織り成すコミュニティ活動が女性のエンパワーメントに及ぼす影響

近年、農山村においても創発的な活動が活発化しているが、それらの活動においては農村生活外の主体(例えば都市住民や企業体のような市民ではない主体)の関わりが生じる。それゆえにその関わりをめぐる当該の地域づくりの担い手の側においても、性別に関係なくその参与を要請することが求められる。このような状況においては、現に行われている農山村でのコミュニティ活動を対象として、その男女の相互作用において(も)女性のエンパワーメントが成されるのかが検討されなければならない。本研究では、以下に示す具体的な調査対象地域での(男女が織り成す)コミュニティ活動において、女性がコミュニティ活動を通じて活動の意欲が高まりうるのかを検討することを目的とする。さらに、それらの活動が(活動に参加する)女性の参加意欲を持続させるものかを検討することとした。

### 3. 研究の方法

上述の目的を踏まえ、以下の2つのフェーズを軸に研究を行う。以下は理論的な研究と実態的な研究に分類されるが、それらは相互に関連し合うため、パイロット的に実態的な研究を進めつつも理論的な研究成果を踏まえて研究方法を修正し実態調査を再構成し実施するというプロセスを踏んだ。

#### (1) 農山村のジェンダーに関する理論的整理

本研究は、農山村における「ジェンダー変容」について、第一に農山村のジェンダーに悩むエージェント自体の変化、そして第二にジェンダーそのものの変容可能性の2つの視点に分けて

整理した。

第一の視点については、主に男性性研究をベースにし既存の農山村における実態調査を整理していった。もちろんのこと農山村社会は、労働場面、生活場面、意思決定場面などの至るところで男女の非対称的な状況に依存しながらの行為が繰り返され、それが複雑に折重なりながら現在の状況を形づくっている。その全場面での男女の非対称性の議論の全てを負うことはこのよう一研究では極めて難しい。そこで本研究では、農山村における男性にとっての重要事項である土地所有の面での制限と、地域社会での意思決定過程への参画の面での制限の二つを射程に置き、それらが極めて男性優位に陥りやすい状況を整理していった。その上で、それが近年の地域生活の現場において、如何なる問題状況を引き起こしているのかを議論していった。

第二の方法については、ジェンダー変容に関わる理論的枠組を提示する諸理論をベースに文献調査を実施した。農山村におけるジェンダーの発言およびその影響に関しては、男女ともが織り成す社会であること諒解した上で、その中でエージェンツが政治的・経済的・心理的側面などの多様な側面が絡まり合っ動いていくことを眼差さなければならない。このような状況におけるジェンダー変容を探る上で、近年ではコンネル(1993/2005/2008)のジェンダー研究がしばしば援用されてきている(例えば秋葉2007/原・大内2012)。そこで本研究においても、コンネル(前掲)のジェンダー研究を参照に調査設計をしていくことを試みた。

#### (2) 農山村の男女が織り成すコミュニティ活動が女性のエンパワーメントに及ぼす影響

上記の理論的整理と整合性を図りつつ、本研究では、よりミクロなコミュニティ活動に対するインテンシブな調査を実施することとした。具体的には、以下のようなスキームで調査を実施することとした。

調査地域：愛知県豊田市大野瀬町

調査対象：補助金を受けることを前提とした地域活動およびその担い手

調査方法：活動を行うプロセスにおける、担い手に対するインタビュー調査、アンケート調査、参与観察

現在の農山村のコミュニティ活動においては、補助金を受ける地域活動において多様な担い手の参画が不可欠であることを仮定した。調査地域における調査実施期間内の活動として、2019年に実施された「音楽コンサート開催による地元出生の他出者との交流活動」が対象となった。この活動においては、「フロー体験チェックリスト」(石村2014)に基づき、活動に対する高揚感を測ることとした。なお、その比較対象として、担い手が担った過去の補助活用事業と現行の活動とを比較することとした。またそのチェックリストを補完するため、調査結果について改めて振り返るためのインタビュー調査を実施した。さらにその後の活動意欲の持続性を測るため、時間を置きつつ再度その活動の意義に関するインタビュー調査を実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 農山村のジェンダーとその抑圧の構図の変化

まず本研究により、「地域社会の構造的性質を再生産する優等生的なエージェンツ＝男性」とは認識できなくなっていること、そして第二に、それゆえ女性のみならず男性が織り成すミクロな行為や相互作用をも、徐々にマクロな社会構造(＝既存のジェンダー構造)との不整合性を起こしている可能性を指摘した。

一点目から整理しておきたい。農山村の家と地域社会の構造とを彩る登場人物は、次第に多様化してきている。確かに家の相続においても、その連続体である地域社会の意思決定場面においても「総体的」に見れば男性中心な状況が根付いている。だがその中においても、「男」として評価される社会的資源の乏しい(と一般的には想定されうる)男性が存在しうる。例えば地域との関わりを持たずに婚姻を契機に移住した女婿は、仮に家の正統な相続者である場合においても、しばしば地域社会の中核的人材の「枠外」ととどまる傾向にあった。かたや近年、夫婦の定住のパターンも家の相続の在りようも多様化しており、家の連続性を維持する負担を男性だけが担い続ける状況が崩れる可能性すらある。このような状況を鑑みるに、「主導的な」男性像を求める農山村の社会的文化的要請に、既に多くの男性が圧迫感を感じていると想定されうる。

また二点目に、一点目に示された状況の中で、男性もが、「例外的な」つまり既存のジェンダーを逸脱するような日常行動を引き起こそうとしていることを示した。またその日常行動は、地域社会の一定程度構造化された環境下で、全くの無自覚に行われる社会的実践ではなく、むしろ様々な葛藤を経て採用/非採用が繰り返されていると考えられる。農山村女性を巡る研究は、男性中心的に形づくられ社会構造と、女性どうしが織りなす諸活動との間に不整合性があることを、これまで強く見出ししてきた。それがいまや、男性どうしが織りなす活動、そして女性と男性とが織り成す活動においても、見出せる可能性があることを指摘した。

以上より見出されたのは、農山村の様々な問題解決場面において、女性と男性とのカテゴリーを超えていく地点に至っているという指摘である。それゆえ、女性と男性とが紡ぐ関係性と織り成される日常行動を、丹念に調査し、その構造と変動性とを析出することがますます求められていることを示した。

#### (2) 農山村のジェンダー変容の可能性

農山村におけるジェンダー変容の方向性、そしてその析出の方法について、コンネル（前掲）の議論を踏まえてヒントを得た。コンネル（前掲）の描くジェンダー論は女性と男性の行動や社会関係のジェンダーを、複雑な日常レベルで描く分析枠組を提供している。そしてそれは日本の農山村研究全般において、現在も将来も求められるインテンシブなモノグラフ調査にも同じことがいえる。そして女性性と男性性の複数性や個々の場面でのジェンダーの多様性の理論化は、農山村ジェンダー変容を（コンネルと同じく）目指す際に資するところがある。

ただしコンネル（前掲）は、基本的には集合行為による具体的政治行動にジェンダー解放の着地点を見出している。しかしながら日本の農山村では、このような明瞭かつ具体的な政治行動によるジェンダー変容という事態が生じづらいといえるだろう。実際、これまで農山村の女性が成し得てきた様々な活動は、夫や家族、そして地域社会や自治体との相互諒解により徐々に可能にされてきたというケースが多い。あるいはそれさえも叶わずに（畠山 2013）、地域外のネットワークに価値を見出す傾向をもちうる（藤井 2007）。そうした意味では農山村におけるジェンダー変容は、極めて「穏当な」、日常の一つ一つの場面での本当に「僅かな」動きの中から析出されてくるものだと考えられる。

以上を踏まえ、農山村のジェンダー変容において、男女間のネットワークと彼・彼女達が織りなすマイクロレベルでの諸活動を、女性のエンパワーメントの基盤とみなすことには意味があることを示していった。

### （3）男女間ネットワークによるコミュニティ活動の成果と課題

以上の見解を踏まえ、マイクロレベルでのインテンシブな調査の必要性を実践するために、調査地域（愛知県豊田市大野瀬町）でのコミュニティ活動の調査を実施した。参与観察的な調査を継続的に実施した後、コミュニティ活動の節目となる2019年11月に定点的な調査を実施した。この調査では、上述のフロー体験チェックリストに基づくアンケート調査、ならびに補足的なインタビュー調査であった。調査対象となったコミュニティ活動の担い手は、計9名（男性6名、女性3名）であった。

フロー体験チェックリストの結果、コミュニティ活動に対して「活動的快（高く覚醒している状態）」や「非活動的快（低い覚醒ながら心地良い状態）」、そして「不安・抑鬱」、「倦怠」について、過去の活動と現在の活動とで担い手全体の統計的な有意差は得られなかった。しかし担い手を二層に分け、「男性壮年層および地元出身者」と、それ以外（女性、1ターン者、若者層）とを比較した結果、この二つの層で明らかな差異が得られた。前者は過去の活動と現在の活動との差異が殆ど見られなかったのに対し、後者は現在のコミュニティ活動に対して明確な感情の高揚が見受けられている。またこのことは、補完するインタビュー調査（アンケート調査と同時に実施した）においても補強する言及が得られた。ゆえにこの調査から、現在のコミュニティ活動においては、男女が織り成すコミュニティ活動（＝男女間ネットワーク）においても女性の活動意欲の高揚は可能であることが示唆された。

他方、この活動を長期的に調査する中で課題も浮上した。活動から約3年を経過したインタビュー調査では、多くの場合、これら活動を経た高揚感が減退している傾向が見出されている。当然ながら2019年以降からの新型コロナウイルス感染症の影響があることが予想されるが、言い換えると、一過性の活動のみに依拠するだけでは、女性の地域づくり活動に対する継続的な動機づけには至らないことが示唆されたと考えられる。ゆえに、女性の（男女が織り成す）地域づくり活動への継続的な関与を可能とする条件、そしてその中での女性の意識変化についての更なる調査が今後の課題として浮上している。

### 引用文献

- 秋葉元輝（2007）「農村ジェンダーの研究動向と課題」、秋津元輝・藤井和佐・澁谷美紀・大石和男・柏尾珠紀編『農村ジェンダー - 女性と地域への新しいまなざし』、昭和堂、pp.1-33.
- 藤井和佐（2007）「克服か回避か - 地域女性リーダーの歩む『場』の構築」、秋津元輝・藤井和佐・澁谷美紀・大石和男・柏尾珠紀編『農村ジェンダー - 女性と地域への新しいまなざし』、pp.71-105、昭和堂.
- 原珠里・大内雅利（2012）「農山村におけるジェンダー関係への視覚」、原珠里・大内雅利編『農村社会を組みかえる女性たち - ジェンダー関係の変革に向けて - 』、農林漁村文化協会、pp.11-30.
- 畠山正人（2013）「コミュニティ・ビジネスを起点とした多様な人材の動機づけの可能性」、『金城学院大学論集（社会科学編）』、第9巻第2号、pp.34-47.
- 石村郁夫（2014）『フロー体験の促進要因と肯定的機能に関する心理学的研究』、風間書房.
- R.W.Connell（2005）*Masculinities*（second edition）, Policy Press.
- レイウィン・コンネル[多賀太監訳]（2008）『ジェンダー学の最前線』、世界思想社.

- ロバート・コンネル [ 森重雄・菊地栄治・加藤隆 雄・越智康詞訳 ] ( 1993 ) 『ジェンダーと権力 セクシャリティと社会学』、三交社。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 島山正人	4. 巻 18
2. 論文標題 伝統産業における女性の創作活動は「女性起業」の事例となりうるか：愛知県瀬戸市の陶芸作家の事例研究から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金城学院大学論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 25-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島山正人	4. 巻 18
2. 論文標題 伝統産業における企業家行動：愛知県瀬戸市における陶磁器産業のケーススタディ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金城学院大学論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島山正人	4. 巻 18
2. 論文標題 現代農山村におけるジェンダー研究のアプローチ：農山村の過疎研究と女性研究との「不幸な結婚」に寄せて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金城学院大学論集 社会科学編	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 島山正人	4. 巻 16
2. 論文標題 中山間地域における「買い物」の域内-域外購買行動の選好に関する研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金城学院大学論集（社会科学編）	6. 最初と最後の頁 36-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------